

「赦し」の概念を検討する
スピノザの「憎しみ」と「愛」の議論を通して

小松原織香（同志社大学嘱託講師）

本報告では、「憎しみ」を手放し、「赦し」に至る過程について、スピノザの『エチカ(1)』を通して考察を行う。従来のスピノザ研究において、憎しみは人間の自由意志があるとの思い込みによって生じる(E/III/49S)ため、理性により正しく憎しみの原因を理解することで寛容(*generositas*)の意味での「赦し」にいたるとされてきた(2)。他方、報告者は、スピノザが憎しみによる「復讐」に対して「愛」を対抗させている部分(E/IV/6S)に着目し、内的変容のプロセスである「赦し」について考察したい。

まず、スピノザは愛と憎しみを次のように定義している。

すなわち「愛は、外部の原因の観念を伴っている、よろこび」よりほかに何ものでもないの「である」、そして「憎しみは、外部の原因の観念を伴っている悲しみ」よりほかの何ものでもないのである(E/III/13S)。

人間は喜びをもたらすような刺激を与えたものを愛し、悲しみをもたらすような刺激を与えたものを憎む。この「悲しみをもたらすような刺激を与える」人を「加害者」、その結果、「憎しみを抱いた」人を「被害者」と呼んでおこう。

被害者は、なぜ加害者が自分を悲しませるようなことをしたのか思い悩む。そして、被害者は、加害者が「自分に憎しみを抱いていたのだ」と想像する。スピノザは、そのとき、被害者が「自分に非がない」と考える場合は、加害者に憎しみを抱くと述べている(E/III/40)。また、「自分に非がある」と考える場合は、恥辱に襲われると述べている(E/III/40)。さらに、被害者は加害者に対して相手にも悲しみを与えようと報復するとスピノザは言い(E/III/40C2)、復讐について以下のように述べている。

われわれが憎む人に禍をもたらそうとする努力は、怒りと呼ばれる。それに反して、加えられた禍に報復しようとする努力は復讐と呼ばれる(E/III/40S)。

以上のように、スピノザは人を害しようとする怒りと、報復しようとする復讐を明確に分けている。スピノザは復讐を、過去の出来事によってもたらされる「事後的な行為」として定義づけている。

次に「憎しみ」に対抗するものとしての「愛」についてである。スピノザは「憎しみは、憎みかえすことによって増大し、また逆に愛によって除去されることができる(E/III/43)」としている。復讐の場合は、被害者は加害者が自らに悲しみを与えた理由を、「自分に憎しみを抱いていたからだ」と想像した。スピノザは、それを「自分を愛していたからだ」と想像すれば、被害者には喜びが生まれると述べている(E/III/43D)。被害者は、自分が加害者に愛されていたのだと考えれば、より加害者に気に入られようとするだろうし、憎しみも悲しみもなくなるとスピノザは論じるのである。被害者が復讐心に打ち勝てば、愛によって憎しみを心から除去できるとスピノザは結論づけた。私はこの理路がスピノザの「赦し」の中核であると考えたい。

その上でスピノザは、この「赦し」に至るのは人間の理性の導きによるものだとして論じている(E/IV/46)。理性的な人間は憎しみに囚われないように努力するし、ほかの人々を憎しみに巻き込まないように努める。報復すれば連鎖によ

って憎しみは増大していくが、理性的な人間は愛または寛容の力で、憎しみを消し去ってしまうのである。スピノザは以下のように述べる。

不正に対して報復する憎しみに復讐を望む人は確かに惨めに生きている。だが逆に憎しみを愛で圧倒する努力をする人は、喜びと平安にささえられて戦う。一人に対抗するのと同じように容易により多くの人々に対抗する。そして幸運の助けを必要とするのは最小限である。実際に、彼に征服された者たちは、彼に喜んで従う。もちろん彼らが力のうえて敗れたからではなくて、自分の力の増大のために従順になっているのである(E/IV/46S)。

以上のように、スピノザは愛によって憎しみを乗り越えようとするのは簡単であると断言し、人間の愛や理解力から明白であると論じる。一度憎しみに対して愛が沸き起こると、あとは崩れ落ちるように「赦し」に至ると述べるのである。それも、愛が憎しみを抑えつけて支配するのではなく、愛することが喜びと平安をもたらすため、憎しみが消えてしまうのである。これがスピノザの「赦し」である。

スピノザ研究者のアルネ・ネスは、スピノザの理性の導きによる「赦し」は、「内なる声」を聞くことなのだと論じた(3)。今日において「理性は感情を支配する」という見方が一般的なのであるが、スピノザは理性を「人間の本性」と位置付けた。その本性としての理性は、「否定的な感情」を「肯定的な感情」に変容させる力を持つ。その意味で、ネスは、スピノザの倫理は「理性が感情を抑え付ける」のではなく、「感情をより完全性に向かうように転換する」ことであると定義し、「赦し」もその一環であり、自らの内部にある理性の導きによって起きると述べた。

では、なぜ「理性の導き」はその転換を行うのだろうか。ネスはその理由に「喜び」を挙げている。人間は憎しみから愛に感情を変容させることで完全性へと向かい、「喜び」が得られる。したがって、スピノザの論に沿って考察すれば、人間は喜びを得るために「赦し」に至るのである。

以上のスピノザの「赦し」の特徴は、外的要因を排することにある。一般的な「赦し」の議論では、加害者の処罰や改悛、謝罪、補償等が条件になることが多い。また、紛争後の共同体の維持を目的として「赦し」が必要であるという議論もある。これらの「赦し」は外部環境が被害者に働きかけて起きる。それに対して、スピノザの「赦し」は、人間本性に基づき被害者の「喜び」が目的とされて起きるため、自己内で完結している。そのため被害者の自律性が守られ、スピノザのいう善へ向かうことができるのである。(1)本報告はバルーフ・スピノザ(Baruch De Spinoza)の『エチカ(Ethica)』について行うが、テキストは『スピノザ倫理学〔羅和対訳〕』(中村為治訳、山本書店、1979年)を用いた。文中の訳については、中公バックス〈世界の名著〉30『スピノザ ライプニッツ』所収の「エティカ」(工藤喜作・斎藤博訳)を参照し、報告者が適宜改変した。

(2)上野修『スピノザの世界』(講談社現代新書、2005年)、河村厚『存在・感情・政治』(関西大学出版部、2013年)など。

(3)Arne Naess, *Life's Philosophy*, the University of Georgia Press, 2002.